

「自分を見つめよ」

ルカによる福音書 18章13～14節

聖学院幼稚園・小学校チャプレン 中村謙一

今朝は、イエス様の「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえ話から祈りの姿勢について共に学びましょう。二人の人が祈るためにエルサレム神殿に上った、とイエス様は弟子たちに語りました。一人はファリサイ派の人であり、もう一人は徴税人でした。この二人はわたしたちが朝礼拝でしているように、神様の御前に出て祈ろうとしていました。

ファリサイ派の人は、「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食をし、全収入の十分の一を献げています。」と、祈りました。このファリサイ派の人は、自分が正しい人間だと思込み、他の人を見下しているのがよく分かります。ファリサイ派の人は、自分自身のことをよく見ていません。ファリサイ派の人は、自分の善い部分だけを見て祈っていました。だから、自分を高めて自慢する祈りとなりました。

わたしたちが祈る時には、天地万物を造られ、全知全能、何でも知っておられる聖なるお方である神様に祈ります。そのようなお方の御前に出て祈る時には、「へりくだる」ことを忘れてはいけません。「へりくだる」とは、「他を敬って、自分を低くすること(謙遜すること)」です。ファリサイ派の人の祈りには、このへりくだる姿勢がまったくありません。その祈りは、むしろ、「自分だけがモーセ律法をよく守ることができて、守れないこの徴税人のような者でなくて感謝します。」と、聞こえます。神の掟である律法をよく守ることができるなら、できない人を覚えて祈り、助けて憐れむべきなのです。他の人を見下し、うぬぼれてはいけません。

祈る時には、自分をよく見て祈りなさい、よく自分を観察する目と心を養いなさい、と、イエス様は弟子たちに祈りの姿勢を教えようとしていました。一方で、徴税人の祈りは、遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら捧げられました。この徴税人は自分自身を本当によく見ていました。そして気がついていたので。神様の御前では、自分がどんなに罪深い人間であり、失敗をしてしまったり、正しくないことをしたり、自分中心に生きてきたり、他者を傷つけたり、もう、あげたらきりがなかったのです。「胸を打ちながら」とは、心の底から「ごめんなさい」と反省していることを示しています。だから、徴税人は一言だけ「神様、罪人の私を憐れんでください。」と、短く祈りました。

ところが、何と、イエス様は、神様に罪が赦されて家に帰ったのはこの徴税人であった、と宣言されました。そしてイエス様は、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」と、言いました。できる人は、自慢ばかりしていないで、できない人のことを思って祈り助けることが大切です。「この徴税人のような者でもないことを感謝します。」などと、他者を見下し、自分を高め、冷たい心で祈ってはいけないのです。

わたしたちは、この地上で十字架と復活に至るまで僕として他者に仕えられたイエス様を手本としましょう。祈る前には、自分自身をよく観察しましょう。そして、善い部分は神様に感謝し、悪い部分は神様に素直に謝って反省をし、赦しを願いましょう。そして、イエス様に心から赦されて、新しい出発をしましょう！ 祈ります。

天の父、私たちをいつもお支えくださる神よ、わたしたちの高ぶる心をおさえ、へりくだる者として、あなたの御前で祈らせてください。自分の善いところも、悪いところも、よく見て観察し、正しく祈らせて下さい。感謝と反省がよくできる心をお育て下さい。

この祈り、神の御子、十字架と復活の主イエス・キリスト、私たちの愛するイエス様の御名によって、御前に御捧げ致します。アーメン。

2016年9月12日 聖学院小学校 全学礼拝